東京の教育
復刊第十七号　東京都教師会発行
（事務局）横浜市都筑区茅ヶ崎南四ノ十四ノ一ノ三一〇

小学校から英語

先田賢紀智

子曰「不憤不啓、不悱不発。挙一隅不以三隅反則不復也」
（子曰く「憤せざれば啓せず、悱せざれば発せず。一隅を挙げて三隅を以て反せざれば、則ち復びせず」。）（『論語』）

「小学校から英語」と聞いて私は初めから反感を持っていた。英語教師なのに、である。官民挙げて日本人は「英語」を崇め過ぎである。大半の日本人が英語が出来ないのは「必要ない」からであり、教育制度が間違っているからではない。必要は発明の母。遼君が出来るのはスピードラーニングのお蔭もあろうが、海外で暮らし海外の選手と渡り合う為に必要だからである。又、白鵬や琴欧洲が完璧な日本語を繰るのも必要だからである。

学校における英語教育は現状で十分。英語に血道を上げるより、国語教育、道徳教育に時間をかける方が時代の要請に沿うものである。ところが英語教育は「英語教」と言うべき「宗教」となっている。しかも国が先導しているから紛れもなき「国家宗教」である。

国が先導となって「体育の日」を「スポーツの日」に変えたと聞いて怒りが込上げた。国民の祝日を英語に変更とは何事ぞ。「日本体育協会」は「日本スポーツ協会」に、「国民体育大会（国体）」は「国民スポーツ大会（国スポ）」に変えると言う。開いた口が塞がらない。政治家が「国民的コンセンサス」やら「コンプライアンス」と知ったかぶりするのとは訳が違う。

元々日本語に無い物、例えば、オリンピック、タービン、ディーゼル等ならやむ得まいが、在る物を態々英語に言い換えて得意顔。・・・これを称して「芸者」「幇間」「太鼓持ち」等と言う。

街中には英会話学校が溢れている。NHKの語学番組の大半は「英語」。言葉は小さいうちに始めた方が良いと「キッズ・イングリシュ」「キッズ・ルーム」なるものがある。私などは「キッズ」と聞くと「傷」を連想する。

「ユニバーサル・タクシー」は車椅子でも乗車できる大き目のタクシーで、「コミセン」は集会所、公民館らしい。Community centerの略語だろうか。

私は中学時代から英語が好きで（英語しかできずとも言える）千葉県の公立高校の英語科教員に奉職四十年。公立校であるから転勤がある。初任は農業高校。所謂「底辺校」である。英語は週三回、三単位。生徒は英語は好きだが「できない」。アルファベットを覚えてないから辞書が引けない。Book と look の区別ができない。

その後、「進学校」に転勤すると「これが同じ高校生か」と思う程の違い。ほぼ全員が国立大学志望。部活動もほぼ全員加入。三年になると授業は大学入試問題中心に。

この子等も出だしは同じ。英語を始めた最初の頃は全員が嬉々として授業に参加した。

I go to Narita.と叫んだだろう。しかし、I が He になると途端に難易度が上がる。

He goes to Narita.

過去形は He goed to Narita かと思いきや、go の過去形は went となる。ここらが躓きの初め。

完了形の He has gone to Narita.（成田に行って、今ここにはいない）は複雑すぎると立腹する者がいる。一方、

Four scour and seven years ago our fathers brought forth upon this continent （中略）government of the people, by the people, for the people, shall not perish from the earth.（あの有名な The Gettysburg Address 最後は「人民の人民による人民の為の政府がこの世からなくならないようにしよう」）を諳んじる者もいる。

スタートは同じだった。同じ先生、同じ授業だったのに差が付く。壁に当ってやる気を無くす者と、壁を乗り越えようと挑戦する

者がいる。

やる気を無くした者に何を教えても無駄。逆にやる気のある者は少し教えるともっと知ろうとする。

冒頭に挙げた『論語』に「不憤不啓不悱不発」とある。「発奮しない者には教えない、発言したくない者には発言法を教えない」。又「挙一隅不以三隅反則不復也」とある。「少し教えたら、その他の事は自分で考えるようでなければ教えても駄目でしょ」。

英語には You can lead a horse to water, but you can't make him drink.と言う言葉がある。「馬を水辺まで連れては行けるが、飲む気がなければ飲ませることはできない」。

やる気の有る無しは個人の努力次第だが、いくら努力しても「出来ないものは出来ないもの」である。私事で恐縮ではあるが、私の脳に英語はどうにか入るが、理科数学は全く入らない。怠け者だからではない。先生の説明を良く聞き、ノートも綺麗に取り、予習復習もやったが頭に残らないのである。いくらやっても出来ないものは出来ない。こればかりは説明は出来ない。説明出来ないものがあるから世の中は面白い。

人には得意不得意があるのが自然である。全員が出来るのはあり得ないことである。数学が出来ないのは先生の教え方が悪いのではない。数学の素養がなかったのである。「無物強請」をしても埒が開かない。すっぱり諦めた方が潔い。無い物を欲しがるより在る物に感謝した方が人生は楽しい。

さてもさても文科省というは余計な指示命令を下す。インターネットに溢れている。

「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」

「初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図る。」

そして

一「グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方」として、

○小学校中学年：活動型・週一～二コマ程度

・コミュニケーション能力の素地を養う

・学級担任を中心に指導

○小学校高学年：教科指導型・週三コマ程度（モジュール授業の活用）

・初歩的な英語の運用能力を養う

・英語指導力を備えた学級担任を加えて専科教員の積極的活用

○中学校

・身近な話題についての理解や簡単な情報交換、表現ができる能力を養う

・授業を英語で行うことを基本とする。

そして

＊小・中・高を通じて一貫した学習到達目標を設定することにより、英語によるコミュニケーション能力を確実に養う

＊日本人としてのアイデンティティに関する教育の充実（伝統文化・歴史の重視等）

さてもさても、的外れで卑屈な文章である。「グローバル化」は意味不明。英語は Global だろうが辞書を引くと a global war（世界戦争） a nonstop global flight（無着陸世界一周旅行） the global output of a factory（工場の総生産高） the dream of global peace（世界平和の夢）等。とすると「グローバル化に対応した」とは「日本国内だけでなく世界を相手にした」なのだろうか。それなら百五十年前の「明治維新」の「五箇条の御誓文」に曰く「知識を世界に求め大に皇基を振起すべし」の精神だ。あの頃は国民の大半が英会話が出来なかった。それでも文明開化とかやらで富国強兵に努め、有色人種で初めて白人と対等に渡り合うようになった。勢い余って「鹿鳴館時代」と揶揄されもしたが。

相手の言葉が分らなければ通訳を雇えば良い。いくらでもいる。肝心なことは中身である。

「コミュニケーション能力」も意味不明。辞書には Communication skill（1）意志疎通を円滑に行う能力（2）その総力を向上させるための講習」とある。ならば「英会話」で十分。

「モジュール授業の活用」とは初耳。辞書によれば「モジュール方式時間割（modular scheduling）における学習時間の単位」という

から「モジュール方式時間割」とはと辞書をかき混ぜても見当たらず。どうやら「細切れ時間を運用した授業」かもしれないと邪推。果たして一時間目の前の十分とかを活用する授業のようである。

「日本人としてのアイデンティティに関する教育の充実（伝統文化・歴史の重視等）」は良し。但し「アイデンティティ」は不明。「自覚」「自信」「誇り」として欲しかった。

日本の文部科学省よ、小手先の制度弄りをやめよ。媚び諂うな。日本の美点を語れ。「古事記」を学ばせ、国の成り立ちを学ばせよ。「万葉集」を学ばせよ。「平家物語」に涙させよ。「武士道」を学ばせよ。若者に勇気と自信を与えよ。「学問のすゝめ」を薦め、自己責任を学ばせよ。

（会員）

戦前の中学国語の教科書を読む（十一）

〔次の文章は、八波則吉編著『現代國語讀本　巻三』（現在の中学二年前期）（昭和十年版）所収のものである。漢字、送り仮名は原文通り。読み仮名は、適宜新たに加へた。〕

貴い傳說

相馬御風

私は先頃一つの貴い傳說を聞いた。それは越後の北蒲原郡の乙村にある乙寶寺といふ古刹に參詣した時であつた。その寺には有名な大日如來を安置した大日堂がある。その境内に、先年特別保護建造物として指定された、何ともいへぬいゝ形をした三重塔がある。かの傳說はその三重塔の建立に關して語り傳へられたものである。

その三重塔の建立は慶長十九年五月で、棟梁は京都の住人小島吉正である。その塔の建築には、さすがに有名なその棟梁も、心を痛め盡したといはれてゐる。どう工夫して見ても、うまく行かなかつた。たうとう彼は工事半ばに、絶望の極、夜逃をしてしまつた。どこへといふあてもなかつたが、彼は唯姿を晦ましさへすればよかつたのだ。

彼は眞暗な夜道をたどつて海岸へと出た。そして海岸に沿うて西へ〳〵と歩みを運んだ。眞暗な砂濱に打ち寄せる浪の音は、時にはこの世に望を失つた彼を誘ふやうにも思はれた。いつそあの暗い波間に飛び込んでしまはうかといふやうな突きつめた思も、幾たびとなく彼を襲うた。然し彼はやはり死ねなかつた。彼は唯むちやくちやに闇の中を歩くのみであつた。

自分の生命を打ち込んで工事を進めて來たあの三重塔の失敗は、苟も藝術を己の生命とする彼に取つては、正にこの世に於ける彼の滅亡に外ならなかつた。しかも彼はなぜかうしてその場を逃げ出して來たか。それを反省する時、彼は我ながらその卑怯を呪はずにはゐられなかつた。自己に對する呪は、やがて自己に對する憎みであつた。けれども、彼はその呪ふべき自己、憎むべき自己を闇の波底に葬つてしまふべく、なほそこに故知れぬ恐怖があつた。さういふ矛盾した心の苦しみは、唯彼の心を狂はせ亂れさせるばかりであつた。今の彼の歩みは、全く狂へる者の歩みに外ならなかつた。

乙寶寺の三重塔

彼の心は底知れず暗かつた。然し、天地の闇はいつとはなしにほの〴〵として、黎明の光に照らされ始めた。ほのかに明るみかけた大海の面では、まづ波の穗の白いのが朝の光を受けた。やがて彼の前には、果しもなげに續いた廣い砂濱が見えて來た。光は刻一刻と地上の明るさを增して行つた。明け離れて行く海には、光を歡ぶがごとく波が小躍してゐた。波間に浮いてゐた鷗の胸は銀色に輝いた。夜露にしつとりと濡れた砂濱に、長く〳〵續いた彼の足迹、むちやくちやに闇の中を歩いて來た彼自らの足迹、——それさへも今は朝の光に照らされて、一條の長い道となつて現れた。

さうした朗かな黎明の大地の上に立つた彼は、今は何もかも忘れはてて、唯茫然とその美に醉うた。そして倒れるやうに、彼は大地の上へ全身を投げ出したのであつた。

それから幾時過ぎたか分らなかつたが、夢

とも現ともなく、彼は耳もと近くに、子供たちの樂しさうな笑聲を聞いた。永い眠から醒めたやうに、彼はふら〳〵と起き上つた。すると、朦朧（もうろう）とした彼の眼の前に、三人の子供が砂上に坐つて、何か頻にやつてゐるのが現れた。何といふ譯もなしに、彼はその方へ吸ひ寄せられた。子供達は遊に夢中になつてゐるのか、彼の近寄つたことに少しも氣づかなかつた。が、その刹那、その憐れな建築師の疲れはてた兩眼には、突如として不可思議な輝きが現れた。死んだやうになつてゐた彼の全身には、不思議な生氣が充ち溢れた。

三人の子供は石を澤山拾ひ集めて來て、それを積み重ね積み重ねして、塔のやうなものを造らうとしてゐるのであつた。彼等は今やすべてを忘れて、その事に全心をうち込んでゐる。甲が一つの石を置くと、乙は次に他の一つの石を積む。更に丙がそれに一石を重ねる。代る〴〵彼等はそれを續けて、着々として或一つの形を組み立てつゝある。が、なか〳〵うまく行かない。積むと崩れる。崩れるとまた積み始める。幾度となく失敗し、幾度となく始める。しかも彼等は失望しない、倦（う）まない、止めない。そして遂に或一つの纏まつた形が出來上る。すると、彼等は共に手を拍ち聲をあげて喜ぶ。そして更にそれを崩して、また新に始めるのであつた。

さうした三人の子供の遊に飽かず眺め入つてゐたかの絶望の建築師は、或瞬間に至つて、貴い何ものかを獲得したやうな確信に輝く面もちを以て叫んだ。

「そこだ。その呼吸だ。その組方だ。」

そしてさう叫ぶや否や、彼は再び狂へる人の如く、もと來た道へと驅け戻つた。

さうした事があつて、漸（やうや）くの事で出來上つたのが、今日見るが如き端嚴微妙な姿をもつた乙寶寺の三重塔であるといふのが、傳說のあらましである。しかも傳說はそれに附け加へて、その三人の子供は大日堂の大日・藥師・彌陀の化身であつたといふのである。

「智慧は私達を子供にかへす。」とパスカルはいつた。私達は更に「子供は私達をほんたうの智慧に導く。」ともいひ得よう。乙寶寺三重塔の傳說は、私にさうした貴い暗示を與へる。「子供は佛の化身であつた。」といふその傳說の附會をも、私はそのまゝ受け容れるに躊躇しない。さうだ、すべての幼兒は神の權化であり、佛の化身である。

（野を歩む者）

（原註）

相馬御風

名は昌治　新潟縣の人　明治十六年生　文學者

特別保護建造物

今は國寶建造物といふ

慶長

後陽成天皇・後水尾天皇の年號（一五九六―一六一四）

パスカル

フランスの數學者・哲學者（1623―1662）。

（編集者註）

慶長の年号の下の数字は皇紀。西暦では一五九六―一六一四である。

日本教師会第六十回教育研究大会

本年度の大会は、令和2年12月26日（土）27日（日）の二日間で開催される予定です。この日程は五輪大会を避けるためのものです。

関西地区の主管です。

お願い

一、会費納入のご協力をお願いします。

年額　二千円

口座　「みずほ銀行」港北ニュータウン支店

店番号　７４３　普通預金　１３３０１５０

名義　佐藤健二

二、「東京の教育」へのご投稿をお待ちしています。

字数は三千字程度以内でお願いします。ただしこれより長いものは数次に分けて掲載することもできます。

仮名遣いは古典現代いづれかに統一して下さい。また、写真や図版の掲載はご相談ください。

送り先は題字下にあります。また、メールの送り先は次の通りです。

事務局アドレス（佐藤）

komasato@juno.ocn.ne.jp